

性器クラミジア感染症の発生動向、2024 年

国立健康危機管理研究機構

国立感染症研究所 応用疫学研究センター

同 感染症サーベイランス研究部

同 実地疫学専門家養成コース (FETP)

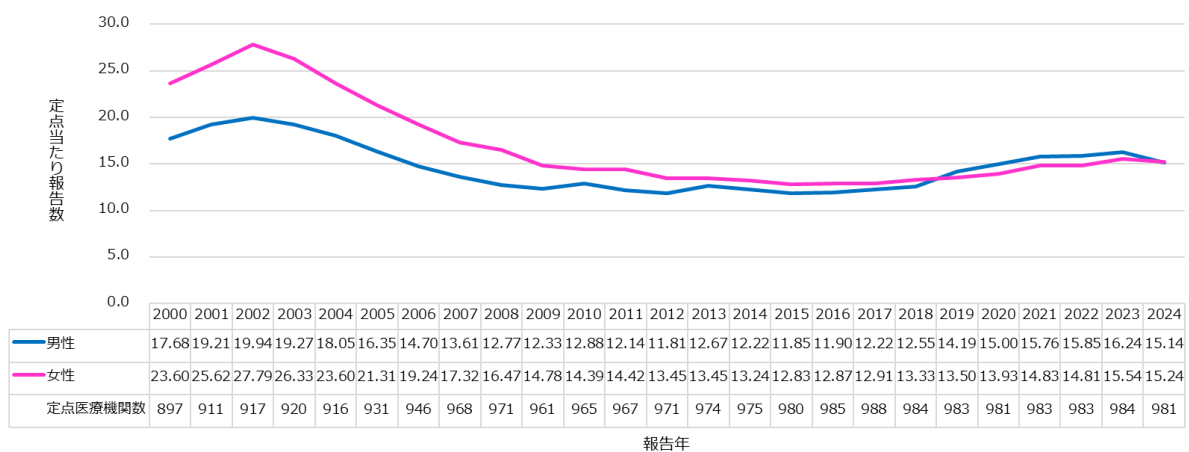
2025 年 11 月 15 日現在

(掲載日：2026 年 4 月 28 日)

性器クラミジア感染症は *Chlamydia trachomatis* を起因微生物とする感染症で、男性では尿道炎、女性では子宮頸管炎を主に起こす。性器クラミジア感染症は感染症法の 5 類定点把握対象疾患で、都道府県が指定した性感染症定点医療機関から感染症発生動向調査に報告されており、性感染症定点医療機関数は 2007 年以降 1000 弱でほぼ横ばいである。性感染症定点医療機関では医師が「症状や所見から性器クラミジア感染症が疑われ、定められた検査方法により診断した」症例について、医療機関の管理者が月単位で届け出ている。定められた検査方法には、尿道や性器から採取した材料からの *C. trachomatis* 分離・同定、抗原の検出、遺伝子の検出、又は血清からの抗体検出が含まれる。

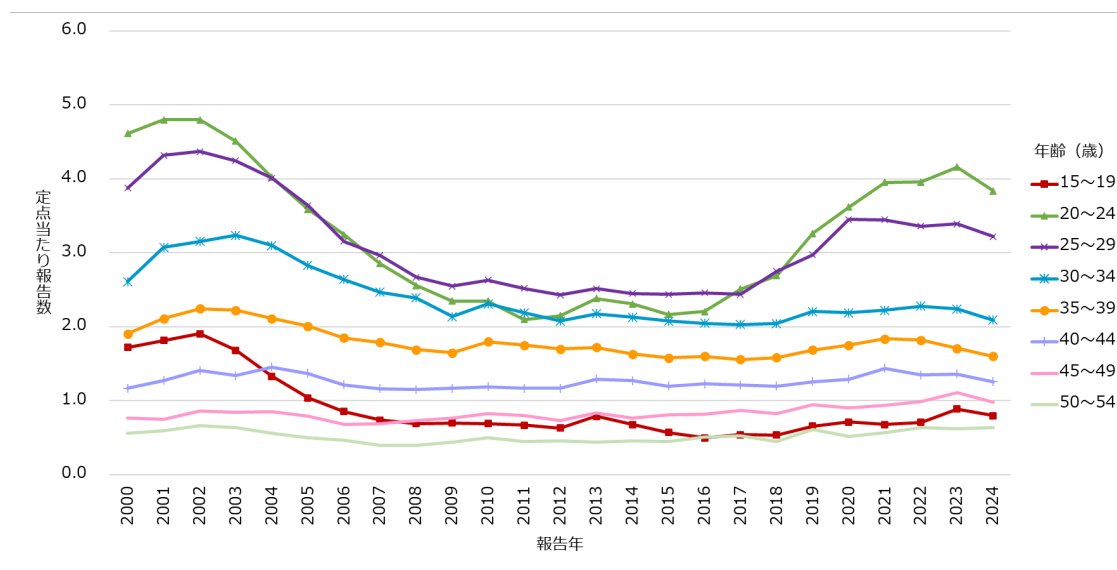
感染症発生動向調査における性器クラミジア感染症の定点当たり報告数は、男女ともに 2016 年から増加していたが、2024 年はともに減少した（図 1）。

図 1 感染症発生動向調査における性器クラミジア感染症定点当たり報告数、2000～2024 年



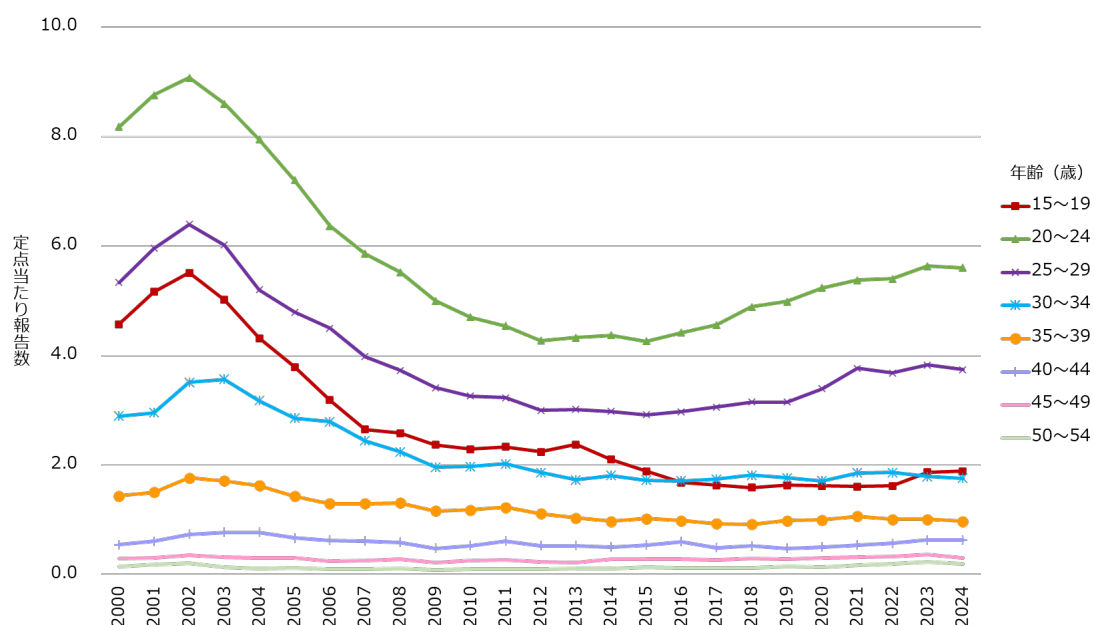
5 歳毎の年齢階級別定点当たり報告数は、男性では 20 代、特に 2019 年以降は 20 代前半が最も多かった（図 2）。20 代は 2010 年からは概ね横ばいで推移していたが、2016 年頃から増加を認め始めた。その増加は 20 代前半で特に顕著であり、2023 年までは増加が続いていたが、2024 年は減少した。20 代後半は 2021 年から減少していた。10 代後半では、2023 年に定点当たり報告数が増加したが、2024 年は減少した。

図 2 男性の年齢階級別性器クラミジア感染症定点当たり報告数、15～54 歳、2000～2024 年



女性の年齢階級別定点当たり報告数は、2000 年以降 20 代前半が最も多かった（図 3）。2016 年から 20 代で増加が認められたが、2024 年は減少した。また、10 代後半では、2023 年に増加を認めていたが、2024 年はほぼ横ばいとなった。

図3 女性の年齢階級別性器クラミジア感染症定点当たり報告数、15～54歳、2000～2024年



2024年は20代男女で定点当たり報告数の増加が減少から横ばいとなったが、依然として2010年代より高い水準で推移していた。特に2023年から認められた10代後半での増加は憂慮すべき状況である。国内では若年人口が減少してきていることから、若年者における性器クラミジア感染症の罹患率は、40代以上の人達に比べ、更に増加してきている可能性がある。

このような状況を踏まえ、性感染症に関する特定感染症予防指針に述べられているように、コンドームの適切な使用を含む性教育の推進（特に若年者）、医療機関への性器クラミジア感染症報告数増加の周知、医療機関等において診断された患者への安全なセックスの啓発やパートナーの診断治療の推進が重要である^{1,2}。

参考

1. 厚生労働省健康・生活衛生局感染症対策部感染症対策課「性感染症に関する特定感染症予防指針」（令和7年11月10日）
2. 日本性感染症学会、「性感染症診断・治療ガイドライン2026」